国立国語研究所学術情報リポジトリ

An analysis of Disagreement strategies based on the conversation data in BTSJ Japanese natural conversation corpus

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 陳, 朝陽, 宇佐美, まゆみ, Chen, Zhaoyang
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002576

『BTSJ 日本語自然会話コーパス』における反論ストラテジーの分析

陳朝陽（湖北第二師範学院/国立国語研究所）†
宇佐美まゆみ（国立国語研究所）

An analysis of Disagreement strategies based on the conversation data in BTSJ Japanese natural conversation corpus

Zhaoyang Chen (Hubei University of Education/National Institute for Japanese Language and Linguistics)
Mayumi Usami (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の中から、異性友人間の討論会話 5 会話（計 88 分）を用い、反論の発話や談話を、その中に現れた言語形式（「疑問文」、「終助詞」、「接続詞」等）の観点からコーディングを行い、分析した。その結果、反論を行う際は、なんらかの形で「フェイス侵害度」を緩和するストラテジーが用いられており、言語形式としては、「よね、ね、さ、けど」などの「終助詞」、「疑問文」、「でも」などの「接続詞」がこの順によく用いられていること、「笑い」が共起する傾向、男性は女性より「疑問文」を多く使う傾向にあることなどが明らかになった。

１．はじめに

異文化間コミュニケーション能力を向上させ、日本語でうまく異論を伝えられる人を育てるために、まずは日本語母語話者が普段何気なく交わす自然会話の中でどのような言語の運用ストラテジーを用いているかを分析する。本稿は『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』（以下、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」と略する）（宇佐美まゆみ監修、2018、国立国語研究所）の中から異性間の友人同士による討論の場面を 5 会話選んで、日本語母語話者の反論ストラテジーを検討し、ポライトネスの観点から考察する。

２．先行研究

２．１　反論の定義

本研究では「反論」の定義として、ポライトネスの観点から発話を研究した Brown and Levinson（1987：66）の定義を援用し、話し手が言語を通じ、「意見の相違」を聞き手に伝達する行為と定義する。Brown and Levinson（1987：66）の定義では、反論を他者に理解されたい欲求であるポジティブ・フェイスを脅かす行為の範疇に入れた。

† ttylily6@yahoo.co.jp

２．２　先行研究の概観

反論に関するこれまでの研究は、主に「テレビ討論での反論を分析対象にした研究」（小宮 1991、大塚 1999、2000、本田 1999、山口 1995、 Honda2002、斎藤 2008）、「日常会話による研究」（椙本 2004、木山 2005、高井 2010、田中 2010、金 2012、高宮 2008、2016）、「小説や教材のデータによる研究」（趙 2001）、に分けられる。

これらの研究は、文法論・意味論の立場から行われる研究が少なくない。特に近年では、語用論の観点から様々なストラテジーは明らかにされている。例えば、高宮（2008）は会話参加者が、対立意見の表明とその緩和のために、「疑問否定形」、「笑い」、「言い淀み」、「言い切りを避ける間接表明」などのストラテジーを用いることを指摘した。しかし、先行研究の分析はテレビ討論からのデータが多く、友人同士による自然会話が少ない。さらには質的分析が多く、量的分析の面からも、課題を残している。そこで、本研究では、先行研究を踏まえたうえで、自然会話を用いて、ポライトネスの観点から日本語母語話者の討論場面における反論のストラテジーを分析したい。

３．研究方法

研究方法は、「総合的会話分析」（宇佐美、2008、2015）の手法を用い、定量的・定性的両面から分析を試みる。具体的には、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」から異性の友人同士による討論の場面においてあらわれた反論表現を選び、反論のタイプを分類し、コーディングして自動集計を行った。分析には、「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット」（宇佐美、2019）を使用した。

３．１　データの概要

同年代の異性の友人同士で男と女と、どちらが得かという話題をめぐって日常的な討論を行う場面を取り上げた。この会話名の中の JF は女性で、JM は男性である。総会話時間は約 88 分で、1 会話の平均時間は約 18 分である。

表 1 会話の概要

番号	会話名	会話時間（分：秒）	発話数（男性・女性）
1	258-17-JF110-JM038	23:14	325（男性 180・女性 145）
2	259-17-JF111-JM039	17:12	224（男性 92・女性 132）
3	260-17-JF112-JM040	15:00	249（男性 113・女性 136）
4	261-17-JF113-JM041	16:25	379（男性 147・女性 232）
5	262-17-JF114-JM042	16:25	172（男性 78・女性 94）
合計	5 会話	88:16	1349（男性 610・女性 739）

３．２　反論の抽出とコーディング

反論には、その前に必ず反論のきっかけになった相手の「先行発話」がある。そのため、「先行発話」と「反論」の定義に合致している発話の両方を、会話の意味的なつながり、つまり文脈から判断した。記号の付け方は次の通りである。A は先行発話で、当該会話における 1 回目の先行発話は 1A、2 回目は 2A、ｎ回目はｎA と表記する。 C は反論で、当該会話における 1 回目の反論は 1C、2 回目は 2 C、ｎ回目はｎC と表記する。先行研究を参考にして以下のように反論が出る際のタイプやストラテジーを分類し、集計するためにそれぞ

れ記号を付けてコーディングした。具体的に見ると、以下の表現を反論の表現とする。

表 2 反論が現れた発話文のタイプとコーディング

記号	形式	例
D	直接的な反論 direct expression	いやいや、いやあ、とは思わない etc
C	接続詞 conjunction	でも、だって、ただ、けど etc
IS	疑問文 interrogative sentence	でしょ?じゃない、じゃん、ないじゃない etc
F	フィラー filler	なんか、えーと、あのー、まあ etc
SFP	終助詞 sentence final particle	ね、よね、けど、さ、かな etc
L	笑いの共起 laugh	

・ D は直接的な反論である。「いやいや」、「とは思わない」などのことばや形式を含む。
・ C は接続詞である。本研究では主に逆説の接続詞「でも、だって」などを対象とする。
・ IS は疑問文である。「でしょ？じゃない、じゃん、ないじゃない」などを含む。
・ F はフィラーで、「なんか」「まあ」「えーと」などである。
・ SFP は終助詞である。現代語の終助詞には「か」「かしら」「な」「ぞ」「ぜ」「ね」「の」「わ」「や」「よ」などがあるが、本研究では、主に反論の際あらわれた「ね、よね、けどね、けどさ」などを指している。
・ L は笑いの共起である。つまり、反論の際、笑いながら、あるいは含み笑いが起きたことを示す。

複数の項目、例えば「接続詞」と「終助詞」は同じ発話に出てきた場合、「接続詞」でも「終助詞」でもカウントする。

以下は各記号を付した会話例を示す。

会話例 1　抽出した「先行発話」・「反論」・「ストラテジー」の記号の付し方の例
会話名(会話の通し番号＋会話グループ番号＋会話の特徴を表す名前)：260-17 友人同士討論（異性）

ライン番号	話者	発話内容	先行発話	反論	ストラテジー
116	JF112	でも、それ言ったら逆に女の人から(んー)、<笑いながら>ちやほやされる…。	5A		
117	JM040	そう?、あんまないでしょ,,		5C	IS
118	JF112	=な<い>{<}?。			
119	JM040	<そ>{>}ういうのって			
120	JF040	うん。			
121	JM112	あ、ほんとに?。			
122	JF040	なんか&,, キャーキャー言われることはさー(んー)、人によってはある		5C	F
123	JF040	けどさ(あー)、 ね、ちやほや、ちやほや…&,,			SFP
124	JF040	<笑い>。			L

４．結果と考察

以下に結果を示す。

表３　各反論のタイプの総発話数に占める頻度と割合（コーディングの対象としない発話を除いた）

話者	直接的な反論 (D)	接続詞 (C)	疑問文 (IS)	フィラー (F)	終助詞 (SFP)	笑いの共起 (L)
	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)
女性	2.8% (7)	6.9% (17)	4.8% (12)	3.2% (8)	11.7% (29)	5.2% (13)
男性	0.8% (2)	16.5% (41)	19.8% (49)	3.6% (9)	21.4% (53)	3.2% (8)
合計	3.6% (9)	23.4% (58)	24.6% (61)	6.8% (17)	33.1% (82)	8.4% (21)

表３から見ると、総発話数に占める「終助詞」の割合が約 33%で、一番多いことが分かった。２番目に多いのは「疑問文」で、約 25%である。「疑問文」と「接続詞」はそれぞれ約 25%、23%で、それほど差はない。「直接的な反論」は 3.6%しかないことが見られた。要するに、反論の際、「終助詞」が一番多く使われている。続いては「疑問文」と「接続詞」である。一方、「笑いの共起」と「フィラー」はあまり使われておらず、「直接的な反論」は一番少ないということが言える。

表４　各反論のタイプの総計に占める頻度と割合

話者	直接的な反論 (D)	接続詞 (C)	疑問文 (IS)	フィラー (F)	終助詞 (SFP)	笑いの共起 (L)	合計
	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)	割合 (頻度)
女性	8.1% (7)	19.9% (17)	13.9% (12)	9.3% (8)	33.7% (29)	15.1 (13)	100% (86)
男性	1.2% (2)	25.4% (41)	30.2% (49)	5.6% (9)	32.7% (53)	4.9% (8)	100% (162)

表 4 から見ると、男性話者においても女性話者においても反論の際、「終助詞」が一番多く使われていることが言える。一方、２番目に多く使われているストラテジーについては、女性話者は「接続詞」で、男性話者は「疑問文」である。男性話者は女性話者より「疑問文」を多用し、両者のパーセンテージに 16.3%の開きがあり、非常に目立っている。「接続詞」と「終助詞」の使用頻度も男性話者のほうが高い。一方、「笑いの共起」と「直接的な反論」の使用に関しては、女性話者は男性話者より頻度が高いという傾向が見られた。

以下は「疑問文」の例を取り上げて質的分析を試みる。

会話例２　男性の「疑問文」使用の例

会話名（会話の通し番号＋会話グループ番号＋会話の特徴を表す名前）：258-17 友人同士討論（異性）

ライン番号	話者	発話内容	先行発話	反論	ストラテジー
5	JF110	じゃあ、今まで得だったことは何?、男で。			
6	JM038	男で得だったこと?=。			
7	JF110	=生きてきて得だったこと。			
8	JM038	えーそんなことってあるのかな。			
9	JF110	だって、比べないもんね、あんまり。	1A		
10	JM038	んん。		1C	
11	JM038	でも&,,		1C	C
12	JM038	ね(んー)&,,			SFP
13	JM038	僕がいつも思ってたのは(んー)、小学生のときに(んー)、女は得だと思ったね。			SFP
14	JF110	何で?。			
15	JM038	だって&,,		1C	C
16	JM038	さ&,,			SFP
17	JM038	男ってやっぱやんちゃじゃん、みんな。			IS
18	JF110	んー。			
19	JM038	そいでいたずらとかをして(んー)、まあ&,,		1C	F
20	JM038	先生によく怒られるでしょう?。			IS
21	JF110	んー。			
22	JM038	=いたずらで(んー)やんちゃで(んー)、あんまりがよくないというような(んー)イメージで、こうひとまとまりにされるでしょ?。		1C	IS
23	JF110	んー、んー。			
24	JM038	でも&,,		1C	C
25	JM038	女性の場合は、女子学生は違うでしょ?。			IS
26	JF110	んー。			
27	JM038	多分、何、まじめで、よく勉強もして(んーんー)、“いい子が多いです”、みたいなまとめ方をされるじゃん?(んー)。		1C	IS
28	JM038	僕はそれがやだったね。			
29	JM038	男の(うん)その悪い方のグループにまとめられちゃうことが。			

30　JF110 んー。

この会話例では、「やんちゃじゃん」、「よく怒られるでしょう」、「されるでしょ」、「違うでしょ」、「されるじゃん」が次々と使われ、男性 JM038 は反論の際、頻繁に疑問文を使用する傾向が見られた。問いかけることにより、相手に相手自身の意見を見つめ直す機会、きっかけを与えることができる。判断基準を相手に委ねる効果を持ち、意見の押し付けを避けられ、フェイス侵害度を軽減する効果がある。

５．まとめ

以上は BTSJ 日本語自然会話コーパスを用いて、日本語母語話者の自然会話をデータに「反論」という言語行動を分析・考察した。その結果、次の 3 点が明らかになった。

①直接的な反論の例は、非常に少ない。

②同年代の友人同士の会話上における反論のストラテジーとして、「終助詞」は一番多く使用されている。「疑問文」は 2 番目に多く、「接続詞」の使用も多い。一方、「フィラー」はこのデータではあまり用いられていない傾向があると分かった。

③男性は女性より「疑問文」を多く使うことが分かった。「笑いの共起」と「直接的な反論」の頻度は、男性より女性のほうが高いことが観察された。

６．今後の課題

今後、更にデータを増やして検証する。反論はコミュニケーションにおいて避けられない言語行為であり、文化によって心理的負担の度合いも異なる。日本語と中国語では、反論の際、相手への配慮の仕方が異なることが考えられる。今後、対照研究を通じて、両言語の反論という言語行動の相違を明らかにし、日本語教育への活用につなげたい。

謝　辞

本研究は、湖北省教育庁人文社会科学研究費 18Y160 の助成を受けたもので、国立国語研究所の機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」 サブ・プロジェクト（リーダー：宇佐美まゆみ）、および JSPS 科研費 18H03581「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）の成果の一部である。

文　献

宇佐美まゆみ（2008）.「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第 4 巻 教育・学習』、ひつじ書房、pp.150-181.

宇佐美まゆみ（2015）.「『総合的会話分析』の趣旨と方法」『日本語教育』162 号.

宇佐美まゆみ（2015）.「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）によるトランスクリプトを用いた研究方法（コーディ ングの仕方）2015 年改訂版」.

宇佐美まゆみ監修（2018）.「BTSJ による日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版」.

宇佐美まゆみ（2019）.「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2019 年改訂版）」.

小宮修太郎（1991）.「討論会場面の会話ストラテジー 」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集 』06pp.145-165.筑波大学留学生教育センター .
山口聖子（1995）.「討論における否定的評価のポライトネスストラテジーーB&L の枠組みの検証」窪田富男教授退官記念論文集世話人編『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』.
本田厚子(1999).「日本のテレビ討論に見る対立緩和のルール 」『月刊言語』28-01pp.58-64.大修館書店.
大塚容子（1999）.「テレビ討論における前置き表現-「ポライトネス」の観点から- 」『岐阜聖徳学園大学紀要 37pp.117-131.岐阜聖徳学園大学.
大塚容子（2000）.「テレビ討論における文末表現-「ポライトネス」の観点から- 」『岐阜聖徳学園大学紀要』39pp.113-125.岐阜聖徳学園大学.
趙華敏（2001）.「反論という発話行為における「だって」と「でも」の機能についてー話者の態度から見てー」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第 1 号.
椙本総子（2004）.「提案に対する反対の伝え方ー親しい友人の会話データを基にして」『日本語学』Vol.23No33.
木山幸子（2005）.「日本語の雑談における不同意ーポライトネスの観点から」『日本研究教育年報』第 9 巻.
斎藤朗子（2008）.「日本語の次ターン修正誘導発話(NTRI)による「反論」ーテレビ討論の自然談話データを基にして」『南山言語科学』第 3 号.
高井美穂（2010）.「問題解決の連鎖における解決志向の不同意と対立志向の不同意 」『日本語・日本文化研究 』19pp.165-178.大阪大学言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース（編）、大阪大学日本語日本文化教育センター（発行）.
田中典子（2010）.「賛成・反対・反対回避に用いられるポライトネス・ストラテジー-対面談話に見られる役割と言語的選択について- 」『清泉女子大学紀要 』58 pp.109-129.清泉女子大学.
金桂英　(2012).「話し合いにおける「不同意コミュニケーション」に関する考察-日本語母語話者同士の談話資料を基にして- 」『待遇コミュニケーション研究 』09 pp.65-79.待遇コミュニケーション学会.
高宮優実（2008）.「日本語母語話者のミーティングにおける会話の分析意見対立の場面に注目して」『外国語としての日本語教育多角的視野に基づく試み』くろしお出版.
高宮優実（2016）.「日常会話における否定的評価のストラテジー」『ことば』第 37 号.
Brown,P&Levinson,S(1987).Politeness:Some universals in language usage[M].Cambridge University Press. pp.66.
Honda,A(2002).conflict Management in Japanese Public Affairs Talk Shows.Journal of Pragmatics.34(5): pp.573-608.

使用コーパス

宇佐美まゆみ監修（2018）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」（リーダー：宇佐美まゆみ）